学校事例 2

認められる経験を通じて培う自尊感情がやる気を生み出す

福井県 永平寺町永平寺中学校

授業前の黙想や無言清掃などで全国的に知られる永平寺町永平寺中学校。落ち着いた学校環境の中で、生徒の学びに向かう真摯な姿勢の涵養（かんよう）や学び合い高め合う集団づくり、主体的な学習態度の育成に力を入れている。

私と生徒とのかかわり方

まず、生徒一人ひとりをしっかり理解する

宮下洋一 校長

校門で誕生日の生徒に「おめでとう」と声掛け

「子弟同行」は本校の伝統です。全校で毎日放課後に行う無言清掃、授業前の黙想、校門を出入りする際の礼は、20年以上続く本校の伝統であり、生徒と共に教師も実践することが暗黙の約束になっています。

私は2013年度、地元の小学校から本校に赴任しました。全校生徒188人の小規模校ということもあり、生徒全員の顔と名前を覚えようと、毎朝、生徒会執行部と一緒に校門前に立ち、生徒一人ひとりにあいさつをしています。その際、誕生日の生徒を調べておき、校門で「おめでとう」と声を掛けるようにしています。「校長先生は自分を見てくれている」と生徒に感じてもらい、学校生活に前向きに取り組む意識が少しでも高まることを望んでいます。授業を見て回る際も、教師の教え方よりも生徒の様子に気を配り、生徒が授業にどのようにかかわっていたのかという観点から、先生方にアドバイスをしています。

生徒とのもう1つの接点は学校便りです。時間を見付けてはカメラを片手に校内を回り、生徒の活動を写真に収めたり、生徒に取り組みの感想を書いてもらったりして、それらを学校便りで紹介しています。生徒の頑張っている様子を全校生徒や保護者に向けて発信することで、生徒一人ひとりの自己肯定感を高めるきっかけになればと思っています。

School Data

◎1950（昭和25）年開校。「自立・振気・敬愛」を校訓とし、「磨き合う」を教育目標に掲げる。曹洞宗の大本山永平寺における参禅学習、授業前の黙想や無言清掃などを通して「礼の心」を育むことを重視している。

校長◎ 宮下洋一先生

生徒数◎ 188人　学級数◎ 6学級

所在地◎ 〒910-1212　福井県吉田郡永平寺町東古市22-46

TEL◎ 0776-63-2075　eメール◎ eichu@mmek.jp

URL◎ http://www.town.eiheiji.fukui.jp/eichu/

公開研究会◎ 未定

行事などがない時は、生徒が毎日記入する生活記録ノートのよいコメントを、担任から教えてもらい、生徒の許可を得て学校便りに転載しています。学校便りで誰を掲載したのかは全て記録し、偏りなく生徒を紹介するようにしています。

生徒の中に私自身が入っていく機会はそれほど多くはありません。先生方の授業や先生方に毎週提出していただく指導計画を見てアドバイスすることで、間接的に生徒の意欲を高めていくことが、校長としての私の仕事だと考えています。

私と生徒とのかかわり方

間違いを認め合える雰囲気をつくる

3学年主任・担任／数学科担当　竹内文江先生

生徒が「出来た」という瞬間を見逃さない

担当教科である数学は、小学校で苦手意識を持って中学校に進んでくる生徒が多い教科です。そこで、生徒の意欲を高めるために私が意識しているのは、「間違えるのは当たり前」という意識を生徒に浸透させることです。

でも、初めは間違いを恥ずかしがる生徒もいます。そのような生徒には、「社会に出てからも間違えることはある。その時にごまかしたり言い訳したりするよりも、『間違えたのでやり直させてください』と言える方が大切だと思うよ」と言って、間違いと向き合う大切さを伝えています。生徒自身が間違いを認めて、「どうして間違えたのだろう」「どうすれば間違わないようになるのだろう」と考えるようにならなければ、いくら教師が間違いを指摘しても頭に入りません。

生徒が間違いと向き合うためには、間違いを認め合える学級の雰囲気づくりも大切です。私は、問題を解いた後に「間違えた人」と言って挙手をさせています。そして、「良い間違いをしていた人がいたよ」と紹介するのです。間違いから学べることを実感させながら、間違いを許容する雰囲気をつくっていきます。

数学が苦手な生徒には、褒めて自信を持たせることが有効な手立てだと私は思います。最近、こんなことがありました。勉強が苦手でどの教科の宿題も出さない生徒がいるクラスを、2年生から担当することになりました。私は授業の最後の5～10分間を「宿題タイム」と呼び、その時間に習ったことをドリルで復習したり、生徒から質問を受けたりする時間として使っています。宿題タイムの時に、その生徒のノートを見ていたところ、「途中式も書くように」という私の指示を守って、解答までしっかり書いていました。そこで、次の授業でその生徒を指名し、黒板に書いて発表してもらいました。生徒にとっては初めての経験だったようで、その後は背筋を伸ばして授業を受けるようになり、宿題も出来る範囲で取り組んで提出するようになりました。

生徒をしっかり見ることは、教師の仕事の1つです。生徒が出来たという瞬間を見逃さず、褒めて励ますことが、生徒のやる気を引き出す上で何よりも大切だと思います。

永平寺町永平寺中学校校長
宮下洋一 みやした・よういち
「『礼の心』を生徒と共に磨きながら、自立・振気・敬愛に満ちた、温もりのある学校を築いていきたい」

永平寺町永平寺中学校
竹内文江 たけうち・ふみえ
3学年主任・担任。数学科担当。「生徒の小さな変化にも気を配り、やる気を高めていきたい」

永平寺町永平寺中学校
田上由美 たがみ・ゆみ
2学年主任・担任。音楽科担当。「生徒には、失敗を通してさまざまなことを学んでほしい」

生徒の心に火をつける

私と生徒とのかかわり方

全ての生徒がリーダーになれる場面をつくる

2学年主任・担任／音楽科担当　田上由美先生

かつての失敗から学んだリーダーづくりの秘訣

クラスづくりを進める際、特に意識するのはリーダーづくりです。行事や場面ごとに軸となるリーダーをつくることで、生徒自らが考えて動く集団にすることが、活気あるクラスとなるには何より大切だと考えます。

その際、リーダーとしての気質を持つ生徒にばかり頼らないようにしています。活動・場面ごとにふさわしいリーダーを選び、生徒が達成感や満足感を抱ける機会となるように工夫していくのです。例えば、理科の先生から「今日の実験でAさんが頑張っていた」と聞いたら、Aさんに「まとめの時間に感想を発表したら」と声を掛けます。また、漢字コンテストに向けて学習している時に、「漢字が得意なBさんに丸付けをしてもらいましょう」とクラス全体に呼び掛けます。

学習の場面だけではありません。冬には、ストーブに灯油を入れる係の生徒を「灯油大臣」と呼んでリーダーにします。「大臣」として表に立つことを嫌がる生徒は「副大臣」に任命し、「あなたの力が必要なんだよ」と言ってサポートを任せます。何らかの役割を任されることで、生徒は周囲から認められていることを実感します。そして、クラスの一員としての自覚を深めると共に、物事に向かう意欲を高めていくのです。

このクラスづくりの方針は、私自身の失敗経験に基づいています。かつて生活指導に課題のある学校に勤務していた時、私は、生活指導や学習指導の中で守るべき基準を明確にして、出来ていない生徒の態度を改めさせようと指導しました。それは、きちんとしている生徒を生かしたいという思いもありしていたことなのですが、生徒の人間関係を考えずに、一方的に「出来る生徒」と「出来ない生徒」という線引きをしてしまっていたのです。その結果、リーダーとして期待していた生徒との関係もぎくしゃくしてしまいました。

担任が一方的に基準をつくり、クラスを1人で引っ張っていこうとしても無理なのだと痛感しました。生徒が主体的に動く中で、担任のサポートやアドバイスがあり、達成感が生徒に返っていく。それが、生徒の成長を促し、私自身の充実感にもつながっていくのだと気付いたのです。

学習計画表の作成を通して主体的な生活態度を養う

学習に対する意欲を高めるために、学年主任として取り組んでいるのは、定期考査前の学習計画表です。これまでも、学習した時間の結果を記録する用紙はありましたが、その上段に学習予定を書くようにしました。そして、試験後、予定を基に時間の使い方を振り返らせています。生徒は自分がいかに時間を無駄に使っているか、無駄な時間を整理すると、習い事や、ゲーム・テレビの時間などの自由な時間が生まれることに気付くようです。ただ単に「ゲームは駄目」「テレビは見ない」と指示するのではなく、生徒自身に生活をデザインさせることで、時間の効率的な使い方を学んでほしいと考えています。

このように、生徒の主体性を尊重することで、「やらされている」という後ろ向きな気持ちがなくなり、責任を持って計画通りに実行しようという意識が生まれます。全ての生徒が出来るわけではありませんが、計画通り実行して、直近の中間考査で良い成績を上げる生徒も多くいました。

中学生は、半分は子ども、半分は大人のような存在です。リーダーとして責任を持たせる、生活のデザインを任せるというように、一人前に扱うことで責任感が高まり、主体的に動くようになるのではないでしょうか。

学校全体の取り組み

無言清掃で育む「礼の心」が生徒の意欲の源泉になる

無言の清掃と黙想で「心を磨く」生徒たち

午後3時26分。音楽が鳴り始めると、あちこちで聞こえていた生徒の私語がぴたりと止み、教室や廊下は静けさに包まれた。生徒はその場に正座をして黙想を始めた（**写真1**）。1分後、音楽が止むと各自、持ち場に向かい、掃除に取り掛かる――同校最大の特色である15分間の無言清掃の始まりである（**図**）。

腰をかがめて廊下を拭き掃除する生徒、ドアのレールまで雑巾をかける生徒、ブラシを使わず雑巾だけで便器を磨く生徒……。中でも大変なのは、体育館の清掃だ。生徒が中腰になって、広いフロアの端から端まで雑巾をかける。12分間、生徒は一言も話さず、誰も見ていないところでも手を抜くことなく、黙々と清掃に取り組む（**写真2**）。そして、3時39分に音楽が鳴ると、再び正座して黙想と反省会を行い、清掃活動を終える。

清掃前の黙想は掃除へ向かう心構えを持つため、清掃後の黙想は自分自身を振り返ることが目的である。清掃後はグループごとに反省会を開き、頑張っていた生徒やよく出来たところを振り返り、皆で拍手をして認め合う雰囲気の中で活動を終える。

図　永平寺中学校の清掃の流れ

15：20	6限目の終了
3分間	清掃場所へ移動、清掃の準備
15：23	音楽A
3分間	雑巾を準備したり、息を整えたりする
15：26	音楽B
1分間	黙想正座 ● 今から掃除をしようとする心の準備 ● 今日の「＋αの掃除」について考える
15：27	音楽Bの終了
8分間	基本の清掃
15：35	音楽C〈区切りの音楽〉
2分間	「＋αの掃除」自ら気付いてする掃除
15：37	音楽D〈後片付け開始の音楽〉
2分間	掃除の後片付け、バケツに水を汲む
15：39	音楽E
30秒	黙想正座 ● 自ら気付いて「＋αの掃除」ができたか ● 他にこんな「＋αの掃除」ができたのではないか
	音楽Eが消える
30秒	反省会 ● 班員からの一言　「＋αの掃除」について反省を言う ● 班長からの一言　自ら気付いていた生徒を褒める 「＋αの掃除」の提案、明日の目標
15：40	清掃終了

＊同校の資料を基に編集部で作成

自分たちの活動が認められる喜び

同校で無言清掃が始まったのは、26年前のことだという。当時の同校は、遅刻や服装の乱れ、授業前着席の不徹底など生活上の課題を抱えていた。1987年、当時の鶴田佳三校長は「礼の心」を教育の中心に据え、朝夕の登下校時に校門に立って校舎に一礼する「校門での礼」、授業や集会の2分前に着席し背筋を伸ばして目を閉じる「授業前の黙想」、生徒全員で取り組む「無言清掃」を取り入れた。以来、これらは同校の伝統として受け継がれ、08年にNHKのテレビ番組で紹介されて一躍全国に知られるようになった。

今でも同校には、全国から大勢の学校関係者が見学に来る。「無言清掃は生徒の意欲を高めることを目的とした活動ではありません。しかし、自分たちの取り組みが多くの人々に認められていると実感することで、自尊感情や自己肯定感を育むきっかけにもなっていると思います」と宮下校長は語る。

部外者の目には新鮮に映る無言清掃も、生徒にとっては「当たり前のこと」だ。小さい頃から同校の卒業生である保護者から話を聞いており、入学前に心構えが出来ている。そして、入学後は上級生が黙々と取り組む姿を

生徒の心に火をつける

写真１　清掃前と清掃後に黙想を行う。音楽が鳴り始めると、その場に正座をして目を閉じる生徒たち。受け身の掃除ではなく、主体的に自ら考える清掃を目指している

写真２　清掃の間、生徒は一言も話さない。互いに気配を感じ取り、自分がすべきことを黙々とこなす

見て、自然に感化されていく。

「入学後、最初の3日間で基礎の形をつくり、3週間で形をマスターし、3カ月で当たり前となり、3年間で感謝の気持ちを持って清掃する態度が身に付きます。本校での経験は、卒業後もいつまでも心に残るでしょう」と宮下校長は語る。

1年生の時は、「3年生のように時間内に清掃を終えることが出来ない」と感想を書いていた生徒も、毎日の積み重ねによって時間内で清掃を終えられるようになる。作業が早くなるだけではない。他の人がバケツをどかした後に残った水滴をきれいに拭き取るなど、誰に言われるわけでもなく、褒められることを期待するでもなく、自然にそうした動作が現れてくるのだ。

「円滑な人間関係や集団活動には、人間関係をつなぐ『のりしろ』となる人材が必要です。清掃の場面だけではなく、どんな場面でも自分がなすべきことをしっかりやり遂げ、周りの人に気を配ることが出来る力が育っていると感じます」と、田上先生は強調する。

各種コンテストで「やれば出来る」を実感させる

永平寺中学校では、漢字、ことわざ、計算、地名、理科、年表、英単語など、各教科の基礎事項のコンテストを実施し、基礎・基本の定着を図っている。

漢字や英単語、計算などのコンテストは定期考査に合わせて行い、定期考査の出題範囲と重なるように問題を設定する。頑張れば、定期考査でもある程度得点できるため、自ずとコンテストに向けた学習にも力が入るという。地名コンテストでは、日本地理なら1年生は都道府県名、2・3年生は県庁所在地、世界地理は覚える国の数を徐々に増やすというように、段階的にレベルを上げている。

コンテストの目的は、「やれば出来る」という達成感を持たせることにある。最低ラインである合格点は90点以上。全問正解した生徒は「満点賞」として、学年集会で学年の生徒全員から拍手を受ける。年間を通して全て満点だった生徒への表彰もある。計算は苦手だが、漢字ならいつも満点というように、得意分野で力を発揮する生徒もいる。逆に、合格点に達しなかった場合は、合格点に達するまで教師が指導し、基礎学力を保証する。

「漢字や地名なら、指定された範囲の学習にしっかり取り組めば必ず点数は取れます。定期考査では思うように結果が出せない生徒でも、やれば出来るという気持ちを実感できるところがコンテストの最大のメリットです」と宮下校長は述べる。

また、同校では、1・2年生の1学期にグループエンカウンターを取り入れて学級づくりを行い、その集大成として1年生は自然教室、2年生は永平寺における参禅学習を行い、自分を見つめ直す機会を設けている。

「自分が認められているという気持ち、本校の生徒であるという誇り、やれば出来るという自信が、生徒を前向きにさせているのです」（宮下校長）